

# 子どもの対人関係をめぐる3つの論点



## 子どもの対人関係について、3つの論点から

今の子どもたちは「友だち関係に気をつかいすぎている」「自分を装ってまで周りに同調しなくてはならない」「友だちでいることに疲れている」といった言説が様々なメディアによって流布されています。これらの言説は果たして本当に静岡の子どもたちの姿をリアルに捉えているのでしょうか？ 子どもたちが友だち関係を結び維持していく上で抱えている問題は何なのか？ 問題解決の糸口はどこにあるのか？ 静教組立教育研究所は、これらの課題に対する答えを探すため、県下1000名余の児童・生徒を対象に“実態と意識”についての調査を行い、『研究所所報No.144』（子どもの人間関係づくりに関する調査）としてまとめました。



今回、“少年期・青年期の人間関係づくりや社会とのつながり”を専門に研究しておられる、静岡大学の荻野達史准教授に、①子どもたちの友人関係の向き合い方、②「公的」な場や問題のかかわり方、③子どもたちの自己肯定感の条件と育み方の3つの視点から、静岡の子どもたちのリアルな姿について『所報No.144』を読み解いていただきました。

荻野准教授の基調提案をもとに、小中学校の教員、保護者、研究者、有識者が3つの分散会に分かれて“子どもたちが抱える課題に対してどのように向き合っていっていいのか”という視点からシンポジウムを行いました。

### 基調提案者紹介



#### ●荻野達史（おぎの たつし）

1968年生まれ。1999年3月 東京都立大学大学院・社会科学研究科 社会学専攻博士課程単位修得退学。現在は静岡大学人文学部社会学科准教授。2010年度より静教組立教育研究所「未来の教育を考える会」協力者、2011年度より同研究所調査部共同研究者としてご尽力いただいている。

#### 主著：「新たな社会問題群と社会運動

―不登校・ひきこもり・ニートをめぐる民間活動― 2006年

「相互行為儀礼と自己アイデンティティ

―『ひきこもり』経験者支援施設でのフィールドワーク― 2007年

『ひきこもり』への社会学的アプローチ 2008年



## 子どもの対人関係をめぐる3つの論点

静教組立教育研究所「子どもの人間関係づくりに関する調査」から

静岡大学人文学部准教授：荻野達史

静岡大学の荻野です。教育研究所の調査部により、かなり充実した子どもたちの対人関係についてのデータが集められています。集められたデータは膨大なものです。青年期に関するメンタルヘルスについての研究を専門としている立場から、調査結果に深い興味を感じました。私が興味深いと感じた幾つかの論点を紹介することが、「子どもの人間関係づくり」について皆様の話し合いの糸口になれば幸いです。

### はじめに：子どもの対人関係をめぐる議論

#### \*流布された議論(イメージ)

- ・子どもたち(青年たち)は人間関係に疲れ果てている
- ・お互いに気をつかいすぎている(空気を読む、反論なんかもってのほか…)
- ・その背景には「自信のなさ」がある(少々の揺さぶりでダメージを受ける「自分」)

今の子どもたちや青年たちのコミュニケーションについて、社会的にも「認識」されている問題があります。「流布されている議論(流布されたイメージ)」というものです。流布されたイメージの1つ「お互いに気をつかいすぎている」ということについて考えてみます。「傷つけないように、傷つかないように…」、KYという言葉が象徴的ですが「場の空気を乱さないように」「相手の言うことに反論なんかしてはいけない」など、携帯電話がよく例に出されますけれど「メールが来たらすぐに返さないと仲間からはじかれちゃう」などです。更に、その背景として「すごく弱い自己がある」「自分というものの殻や輪郭があやふやで、突かれるとすぐに動揺し、揺らいでしまう」「すごくダメージを受けやすい」ことをあげて、お互いを傷つけないように振る舞っている、という説明もされています。

ひと言で言うと自己肯定感が非常に弱いところが、おっかなびつくりのコミュニケーションの背景にあるというわけです。そのあたりのことについて調査結果をもとに考え直していきたいと思います。

### 調査でまず確かめられたこと

#### \*流布されたイメージは必ずしも正確とはいえない

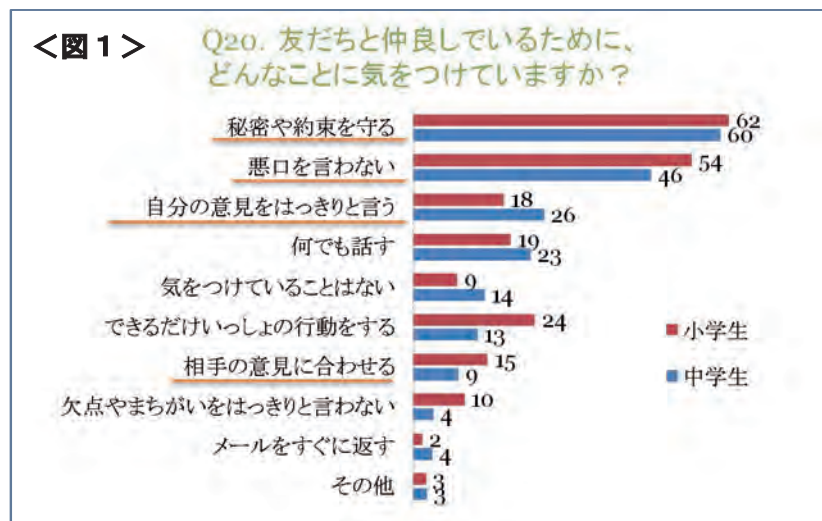
- ・友だち関係で気をつかっているのはいたって「まっとう」なこと
- ・友だちとのトラブルにもきちんと向き合っている様子がうかがえる
- ・ケータイやメールが友人づくりに必要だと思っているのは、むしろ少数派

流布されているイメージを否定するというわけではありません。そういう側面が一定の子どもの中にあることは確かだと思います。しかし、「流布されたイメージがすべての子どもたちを覆い尽くしている状況ではない」ということは言えるのではないのでしょうか。例えば、今回の調査では「友だちと仲良しでいるために、どんなことに気を付けていますか？」という問いに対して、子どもたちが最も気を付けているのは、相手の顔色をうかがって「反論しない」ということではありません。ごく「まっとう」なことに気を付けているということがわかります<図1>。



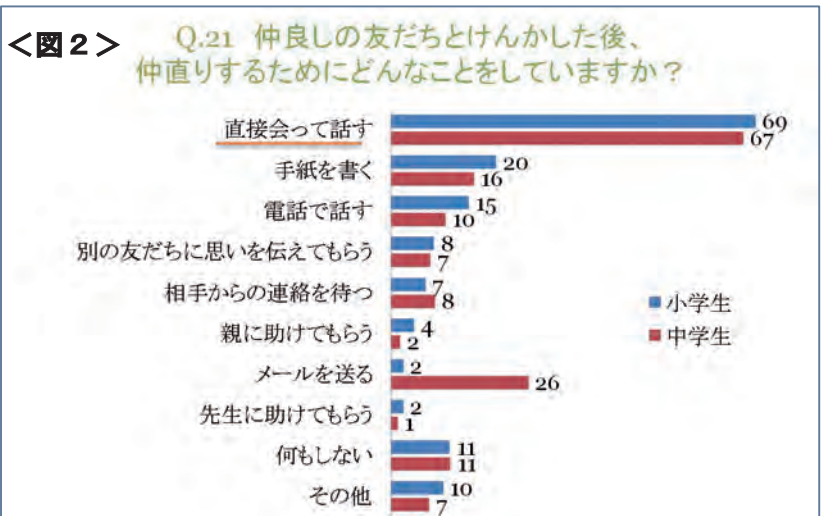
「仲良しの友だちとけんかした後、仲直りするためにどんなことをしていますか？」という問いに対して、しごく「まっとう」な対応を多くの子どもがとっているということがわかります。それから携帯電話に関しても「肌身離さずもっている」「風呂に入っている間も気になってしょうがない」と思っている子どもは少数派なのだということがわかります。教育研究所の調査によると、携帯電話の保有率は中学生で50%、小学生で24%ということです。これから携帯電話のことについて話をするときには、こういう数の前提があるということを知っておいてください。

さて、「友だちと仲良しであるために、どんなことに気を付けていますか？」という問いに対する答えで一番多いのが「秘密や約束を守る」ということです。社会学者というのはあまり価値判断をしないものなのですが、私は、まっとうな答えだと思います。あと「悪口を言わない」という答えも多い。「自分の意見をはっきり言う」という子どももけっこうな割合でいます。「相手の意見に合わせる」というのは少数派です。こうした結果を見ると、子どもたちはちゃんとしたコミュニケーションをとっているという側面が見えると思います。



<図2>は、「仲良しの友だちとけんかした後、仲直りするためにどんなことをしていますか？」という問いに対する回答です。

小中学生とも「直接会って話す」という答えが70%です。これも“すごいこと”だと思います。けんかしてお互いの仲が壊れかけていると感じたとき、「直接会って話をする」という子どもが7割いるというのは“いい結果”だと思います。「メールを送る」というのも中学生になると増えます。「手紙を書く」というのがありますが、メールも手紙もある意味では(会って話すことの)代替的な手段ですから、メールを使っているから「良くない」ということではないと思います。「ごめんね」といった、軽い謝罪をして、改めて話ができるということであれば、それはそれでいいと思います。



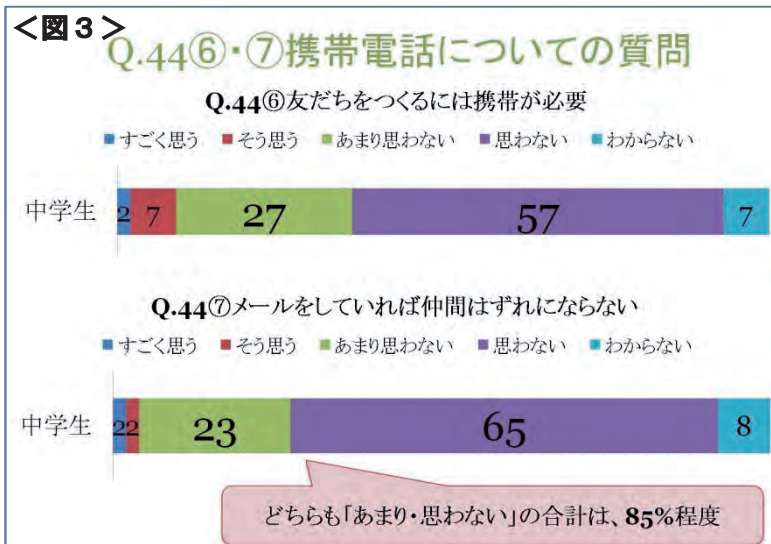
携帯電話についてですが「友だちをつくるには携帯が必要か?」、「メールをしていれば仲間はずれにならないか?」という問いに対して「あまり思わない」「思わない」と答えている「そう思わない派」は85%になります<図3>。

子どもたちは、必ずしもケータイが必要ではないと考えているし、メールをしていれば大丈夫だとも思っていないということです。「携帯依存」ということでくくれない現実がこのデータから見えると思います。



子どもたちの人間関係をくくっている「流布されたイメージ」というものは、この調査結果によってある程度相対化されたということが言えるのではないかと思います。ただし、全然問題がないということではありません。やはり気にかけながらわれわれ大人として考えていかなくてはならないことではあります。

以上のことを踏まえながら、論点を3つ抽出しました。



### 3つの論点

**\*われわれが気にかけ、改めて考えるべきことは？ 調査結果から見えてくること**

①友人関係への向き合い方…例えば、男女の違いに見られる「バランス」の問題など

②「公的」な場や問題への関わり方…小⇒中に見られる消極化の背景は？

③自己肯定感の条件と育み方…自己肯定感の低いグループの問題や自己肯定感へのアプローチ

一つ目の論点は、「友人関係への向き合い方」ということです。人間関係について「気にしすぎる」ということも問題ですが「気にしなさすぎる」というのも問題だと思います。どのようなバランスが求められるのだろうかということが論点の一つになると思います。

ここで気になるのは「男女の違い」ということです。男子と女子でコミュニケーションの取り方に違いが見られます。男子にはひどく無頓着な層がいて、女子には過剰に気をつかいすぎる子どもがいるということです。もちろん全部がそうだということではありません。無頓着なタイプが女子に比べて男子に多く、過剰に気をつかいすぎるタイプの女子が男子に比べ圧倒的に多いということです。

二つ目の論点を「公的な場や問題への関わり方」としました。授業や生徒会活動などにどれだけ積極的に関わろうとしているのかということです。特に、小学生の時にはけっこう発言しているのに中学生になると発言の数がすごく減ってしまいます。その背景にあるのは何かということを考えてみたいと思います。

三つ目の論点は自己肯定感についてです。「自己肯定感の条件と育み方」としました。これも全員の自己肯定感が低いということではありません。自己肯定感が低いグループがあり、それが低いことによってもたらされる問題があるということに注目します。自己肯定感を高めることにどうアプローチしていけるのか、いろいろな方面から考えていきたいと思います。



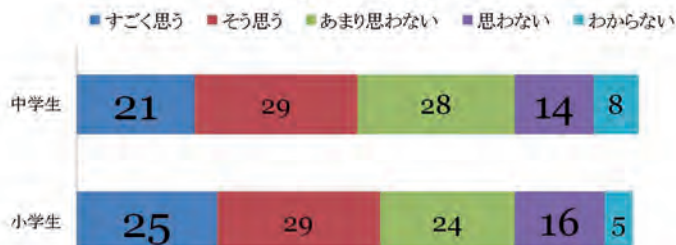
## 論点1：友人関係の向き合い方について…「無頓着さ」と「過剰さ」の間で

「同じクラスの人からどのように見られているか気になりますか？」という問いがあります。

調査結果＜図4＞を見ると回答は「すごく思う」「思う」、「あまり思わない」「思わない」に分かれています。「すごく思う」というのもストレスが大きいと思いますが、しかし、「全然思わない」というのもいかななものかと思えます。他人の視線がまったく「気にならない」というのも問題です。

### 論点① 友人関係の向き合い方について(1) ＜図4＞ ～「無頓着さ」と「過剰さ」の間で～

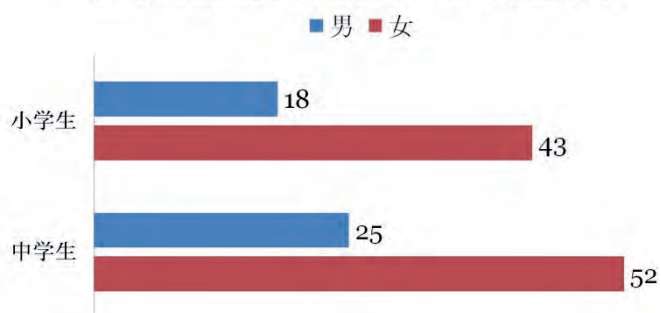
Q22 同じクラスの人からどのように見られているか  
気になりますか？



気にしすぎるのも問題かもしれないが、気にしなければいい、  
というものでもない。なにが必要で、なにが過剰なのか？

### ＜図5＞ 友人関係の向き合い方について(2) 男女差にみる気になるポイント1

今の友だちは悩みが相談できる友だち(回答比率)



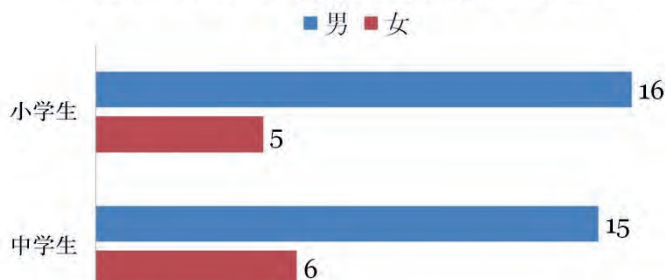
小中学生ともに、男子は女子の半分以下。

次に取り上げるのは、男女の違いです。  
「今の友だちは悩みが相談できる友だちか？」、つまり、「悩みを相談できる友だちがいるか」ということですが、「いる」と答えた男子は女子の半分です＜図5＞。男子には「相談できる友だちがいない」という傾向が強いということです。一般的に「男性は助けを求めることができない」と言われています。男性は、「助けを求めたり、助けたりする」といった関係を築くのが苦手だということが、小学生のうちから明らかになっているのではないのでしょうか。

まだ少し話したいことがあるのですが、ひとまず先にすすみます。「友だちとけんかした後、仲直りするためにどんなことをしていますか？」という問いに対し、「何もしない」という答えについて考えてみたいと思います。けんかしたのに、仲直りするということに「自分から何らかの手を打っていない」という小学生は、女子の5%に対し男子は16%います。中学生だと、女子の6%に対し男子は15%です。男子は女子の3倍の子が「何も手を打っていない」ということです＜図6＞。

### ＜図6＞ 友人関係の向き合い方について(3) 男女差にみる気になるポイント2

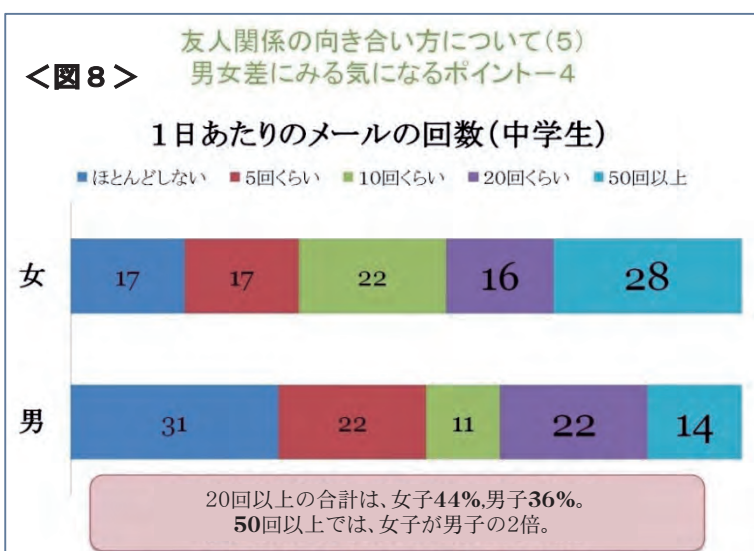
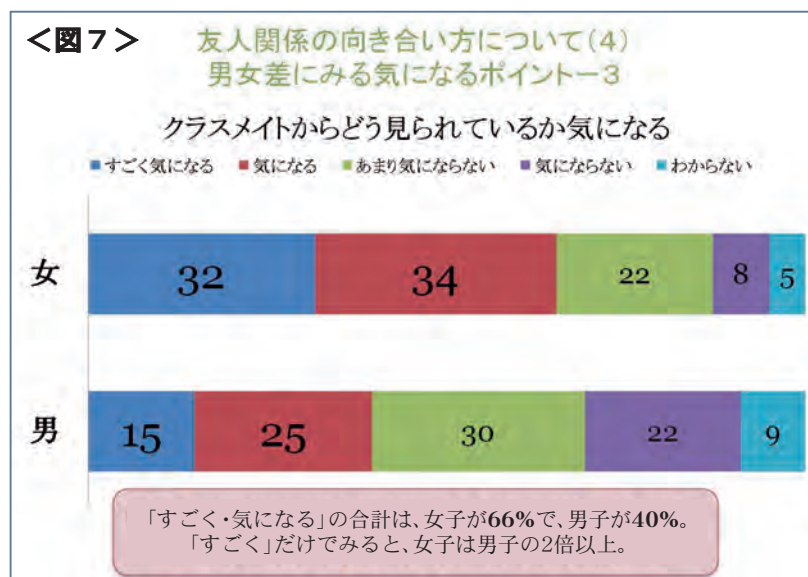
友だちとケンカした後に仲直りするためにすることはない



全体のなかでは少数派である。しかし、小中学生ともに、関係修復のために何もしない男子は、そうした女子の3倍もいる

家でけんかをしたときの関係修復を妻に任せている自分のことが、反省を含めて思い出されます。男子の中に、関係を維持するために払うべきコストというのを払わないで済ませてしまう、あるいは払いたいけれどそのスキルがないという問題があることを感じます。

今度は女子の問題です。「クラスメイトからどう見られているか気になる？」という問いに、「すごく気になる」「気になる」と答えた「気になる派」が男子は40%いるのに対し、女子は66%います<図7>。「すごく気になる」を選んだ子どもだけで見ると、女子は男子の2倍以上の数になっています。



「1日あたりのメールの回数」という問いに対する回答傾向も象徴的です<図8>。20回以上(50回以上を含む)と答えたのは、女子は44%、男子36%です。50回以上で比べると女子は男子の2倍になっています。50回以上になると日常生活に支障をきたしているのではないかと思います。人間関係における男女の違いを示していると思います。

## 論点1のまとめ

### \* どれほど人間関係に気をつかうべきなのか？

- ・ 正解のない問いではある…個々人が経験的に自分にとって適度な形を学習していけばよい
- ・ しかし、大人の側が「適度な」姿について何ら語れないとしたら、それも問題がある
- ・ 時代的な変化も視野に入れて

### \* 男女の違いへの注目も、この問題を考える手がかりになる

- ・ 男子の側に、悩みを語る場や関係修復の経験の少なさがある
- ・ 女子の側に、関係に配慮しすぎて疲弊する可能性がある



論点1についてまとめてみます。人間関係にどれほど気をつかうべきかということについては正解がないと思います。基本的には、個々人が自分にあったコミュニケーションの取り方というのを成長の過程で身に付けていけばいいことだと思います。ですが、友人関係の関係修復をしなかったり、携帯電話を1日50回以上使ったりすることについては、私たち大人が“人間関係の適度なメンテナンス”“コミュニケーションで求められることは何か”ということ伝えていく必要があると考えます。ある種の極端さというものに対しては大人の働きかけが必要だと思います。

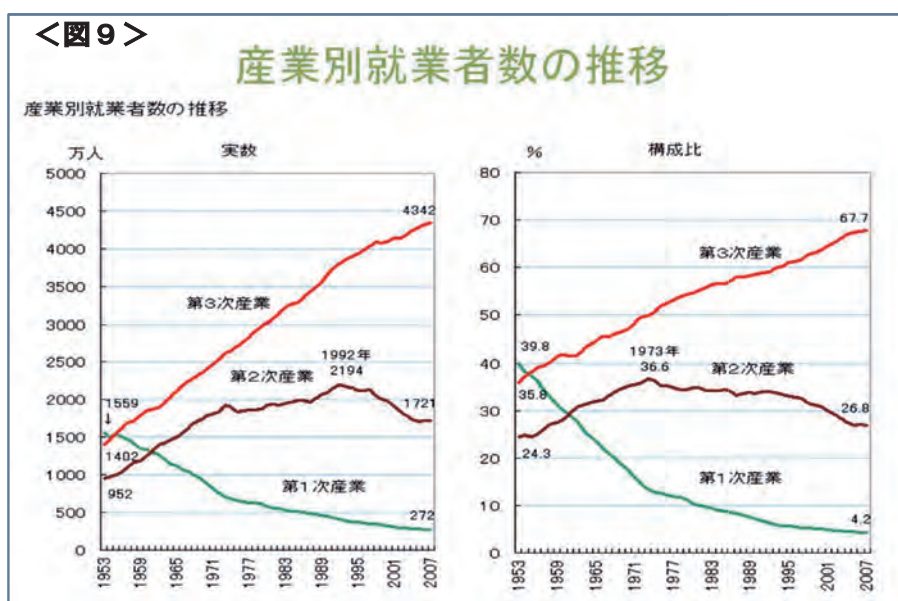
時代の変化ということも視野に入れる必要もあるでしょう。社会がきめ細かなコミュニケーションを必要としてきています。その一番大きな原因というのは産業構造の変化です。＜図9＞は「産業別就業者数の推移」を示したものです。

農業など、ものを育てるという仕事に従事している人が少なくなった反面、第3次産業の伸びが顕著です。第3次産業というのは「人を相手にして初めて成り立つ仕事」です。そういう職業が圧倒的に増えている社会というのは、ある部分、「正しいから、正しくないから」ということでは動かないところがあります。人と人とのやりとりの中で初めて一定の成果が得られる。つまり、人と人とのやりとりをいかに上手に行うかということが成果につながる

わけです。人間関係に関して微細な感覚ということが求められる社会になっていきます。

コミュニケーションについてどれだけ細かな感覚が求められるかということは、時代というか社会からの求めによるところが大きいと思います。そのあたりも含めて、コミュニケーションの「適度さ」というのを考えてもいいのではないかと思います。

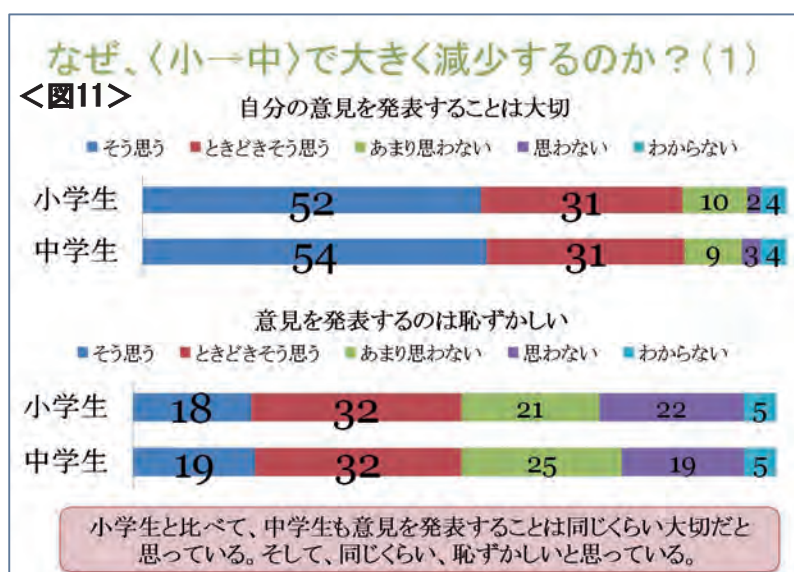
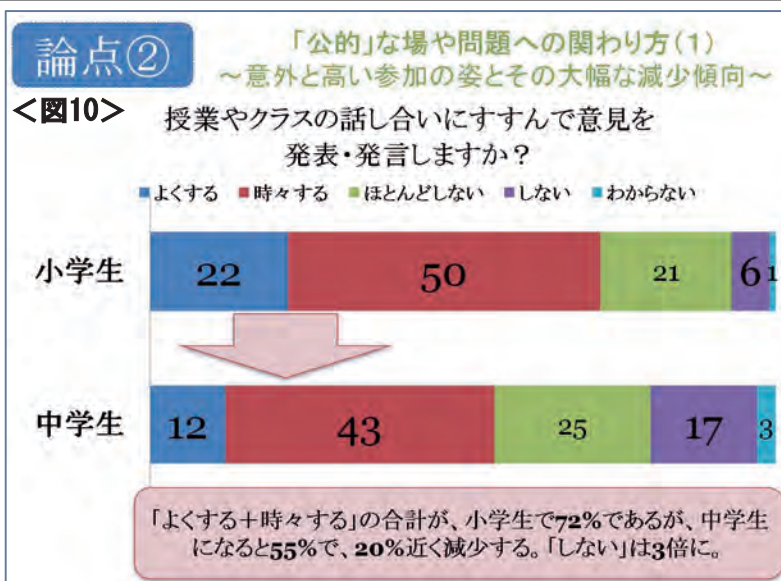
更に、男女の違いに注目したのですが、どうも男子には悩みを語る場とか関係修復の経験というものがないのではないかと思います。男子は、助けを求めることをせず一人で頑張るというか、解決するまで歯を食いしばって頑張るといったようなことが刷り込まれていて、逆に女子には「感情労働」ということが求められてきたように思います。誰でも優しい言葉をかけられたいし、それによってストレスが軽減するということも事実です。こうした「感情労働」の担い手を女性に求めてきたのです。それが子どもたちにも反映して、早いうちからいろいろな形で「教えられている」のだと思います。男子は関係修復に自信がもてず、女子は気をつかいすぎてしまう。そういうことが小学生くらいから如実にでてしまっていると思いました。



## 論点2：「公的」な場や問題への関わり方について…意外と高い参加の姿と大幅な減少傾向

論点2に移りたいと思います。

「公的な場や問題への関わり方」で見ますと意外と高い参加の様子が見えます。例えば「授業やクラスの話し合いにすすんで意見を発表・発言しますか？」という問いに小学生が70%以上、中学生になると減りますが、55%の子どもが「する」と答えています<図10>。この数字は、先生方の実感からすると「意外と多い」ということだと思います。しかし、小学生から中学生になると20%下がってしまいます。小学校5年生から中学校2年生というわずかな間に20%の変化がおこるといえるのは気になる問題です。更に、「発表しない」という答えが中学生になると3倍に増えます。これも無視できません。私が職場で大学生を見ているときにも、インフォーマルな友だちとの関係ではよく喋っているのに、ゼミなどの「公的な場」になると口をつぐむという姿が見られ、問題を感じています。



私たちが生きていく上で、地域や職場では協働で物事にあたらなくてはならないことがいくらか出てきます。そうしたときに、フォーマル(公的)な場でお互いの体面を互いに尊重しながら一定のコンセンサスを確立していくというスキルは、どうしても必要なことだと思います。ですから、小学校から中学校にかけて、公的な場への参加の意識が20%も減ってしまうということは、大きな問題ではないかと思っています。

では、何が原因なのかということですが、私はこの調査で非常に面白い結果が出ていると思います<図11>。

中学生になると自分の意見を発表することを「大して重要ではない」と考えるようになっていきましたが、そんなことはないようです。自分の意見を発表することは「大事だ」と答えているのは小学生と中学生で割合的には変わりません。更に、中学生になると思春期に入り羞恥心が上昇するということで話さなくなってしまうのかと思うと、それも違います。「意見を発表するのは恥ずかしい」という問いに対する答えはほとんど変わらないのです。ですから「恥ずかしい」というのが理由ではありません。



中学生になると誹謗中傷とまではいかなくても、「発表すると後で何か言われるのではないか」ということが原因ではないかと思っていました。しかし、何か言われることを気にしているのは小学生の方が多く、中学生になると減ります<図12>。それにもかかわらず中学生は発表しなくなります。「自分の思っていることや考えを相手にうまく伝えることができると思う」という自信は、中学生になるとちょっと減りますが、20%減ることを説明する根拠としては弱いと思います。20%の減少に合致するのは「意見を発表するのはめんどう？」という問いに対する回答です<図13>。

### なぜ、〈小→中〉で大きく減少するのか？(2)

<図12>

発表すると、後で何か言われるかと気になる

■ そう思う ■ ときどきそう思う ■ あまり思わない ■ 思わない ■ わからない



自分が思っていることや考えを相手にうまく伝えることができると思う

■ 思う ■ 少し思う ■ あまり思わない ■ 思わない ■ わからない

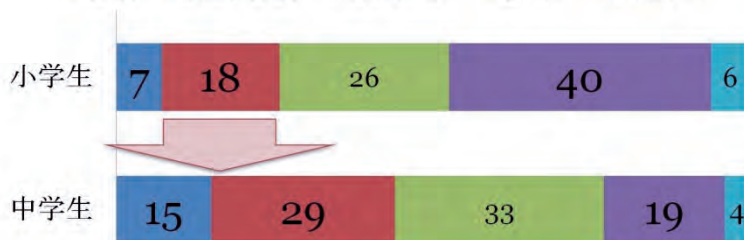


むしろ、小学生の方が、後で何か言われることを気にする傾向がある。ただし、中学生の方が、考えを伝えるのが難しいと感じている傾向が若干ある。しかし....

### なぜ、〈小→中〉で大きく減少するのか？(3)

<図13> 意見を発表するのはめんどう

■ そう思う ■ ときどきそう思う ■ あまり思わない ■ 思わない ■ わからない



意見発表が、〈小→中〉で減少するもっとも有力な理由は、意見を言うことは、「めんどう」という思い(の増加)にあるようだ。「そう・ときどき思う」の合計は、小学生25%から、中学生44%に、ほぼ20%増加している。

意見を発表するのは「めんどう」と「思う」「ときどきそう思う」の合計が中学生になると20%増加しています。どうやら、意見を言わなくなってしまう直近の理由として「めんどう」ということが大きく関わっていると思われます。

### 論点2のまとめ

\*子どもたちの「フォーマルな場」や「公共的なこと」への参加度(発言の頻度)は小⇒中で大幅に低下する。

- ・意見表明することの価値自体が低下したからではない。
- ・羞恥心が特に上昇したからでもない。
- ・誹謗中傷を恐れる傾向が増加したからでもない(むしろ低下している)
- ・多少、「他者に伝えることの難しさ」を感じる傾向は上昇はしているが、それが決定的な理由とも思えない。

\*最も有力な理由は、意見を言うのが「めんどう」という態度傾向が中学生で急上昇することにあるようだ。

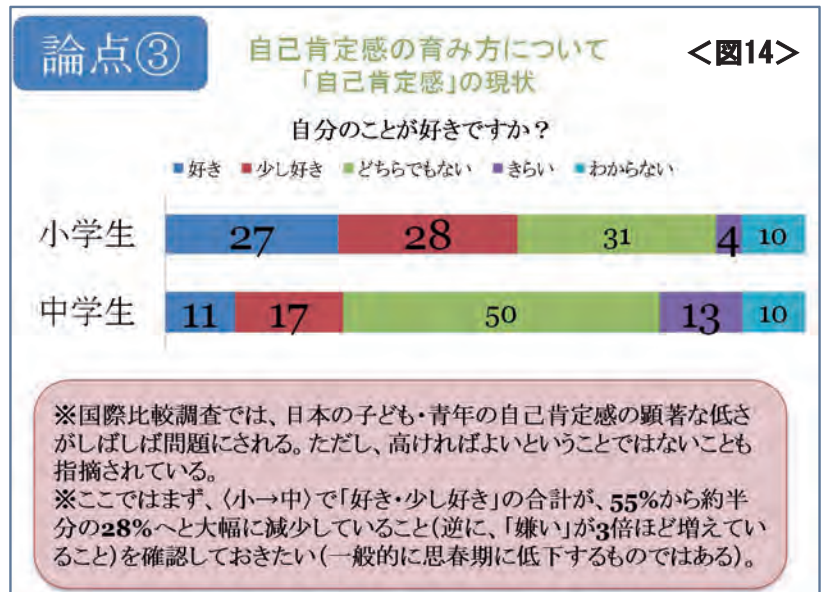
\*では、その「めんどう」の急増は、何によるのだろうか？



### 論点3：自己肯定感の育み方について：自己肯定感の現状

次に、論点3の自己肯定感の現状についてお話しします。今回の調査では「自分のことが好きですか?」という質問をしています<図14>。

問いに対し、小学生で55%、中学生で28%が「好き」「少し好き」と答えています。日本の子どもの自己肯定感や自尊感情は、諸外国の子どもに比べて低いと言われています。私は、自己肯定感や自尊感情が一概に高ければいいというものではないと思っています。ここで諸外国に比べて高いから…、低いから…、ということを語ることはおいておきます。気になるのは小学生から中学生になると30%近く低下しているということです。なぜ、中学生になるとこのように落ちてしまうのか。心理学では知られていることですが、一般に思春期になると自分を見つめるというプロセスを通して自分に対してネガティブになるという傾向があります。しかし、ずいぶん落ちるものだなと思いました。

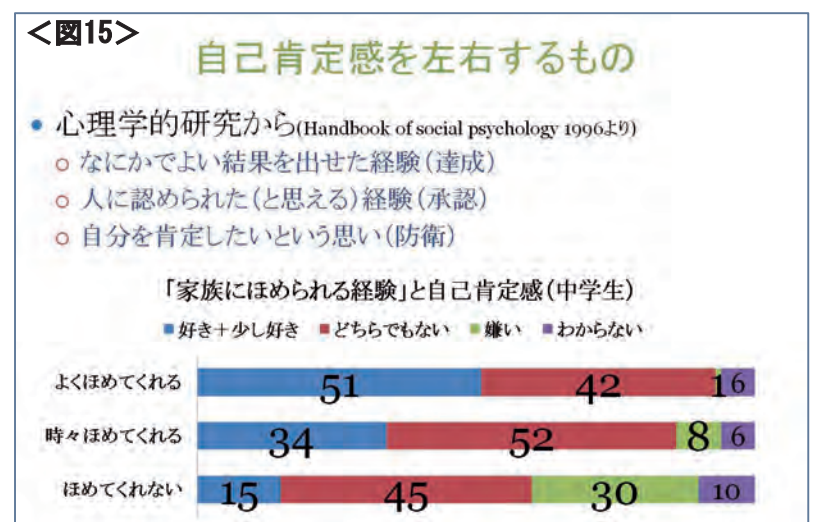


#### 自己肯定感というものはどういうふうにつくられるのか

- ・達成…何かでよい結果を出せた経験
- ・承認…人に認められる(と思える)経験：褒められるという経験
- ・防衛…自分を肯定したいという思い：何かあっても自分は正しいと思うこと

このような経験や感情が自尊感情を高めると言われています。自己肯定感はいろいろな側面から考えられなくてはいけないわけですが、「認められたという経験」が大きく関係していると思われるのが <図15> です。「家族にほめられる経験」と自己肯定感をクロスさせたものですが、中学生に限っていると、家族にほめられた経験と自己肯定感との相関がかなりクリアに出ています。「ほめられている」と思っている子どもは自己肯定感が高いということは確かなことだと思います。

自己肯定感が小学生から中学生になると減るということについて注目して「あなたのがんばりを認めたりほめたりしてくれる人は誰ですか?」という問いに対する答えを見ると、中学生になると下がっています<図16>。



例えば、友だちについてはそれほど変わりませんが、親は84%から62%、祖父母は59%から33%と大きく減少し、学校の先生も20%近く減っています。中学生になると「ほめられる体験」がどうして減るのか、考える必要があると思います。

議論の順序が逆になってしまいましたが、なぜ自己肯定感ということを取り上げなくてはならないかということですが、調査の結果から見るとやはり「自己肯定感というのは大事だ」ということは対人関係に限ってても言えると思いました。

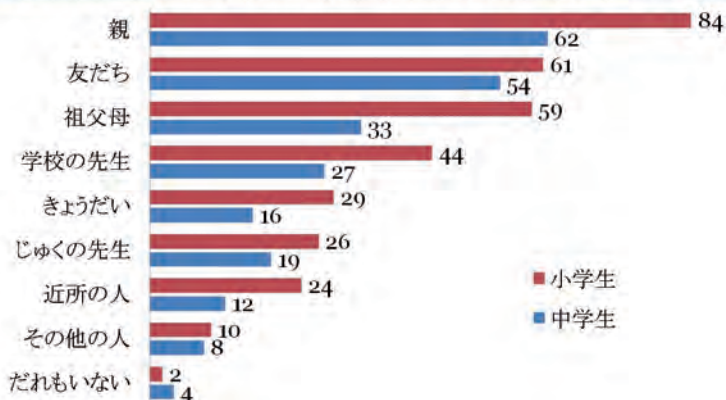
<図17>は、自己肯定感と「自分の考えをうまく伝えることができるか」ということをクロスさせたものです。

自分を「好き」と答えている子どもの22%は「自分の考えをうまく伝えている」と答えていますが、「嫌い」に向かってどんどん減っていきます。

「少しそう思う」も同じように減っていっています。更に気になるのは「自分の考えをうまく伝えることができる」と答えないと答えた数字です。自分のことが「嫌い」と答えた子どもで極端に高くなっています。

<図16> ほめられる経験の減少について

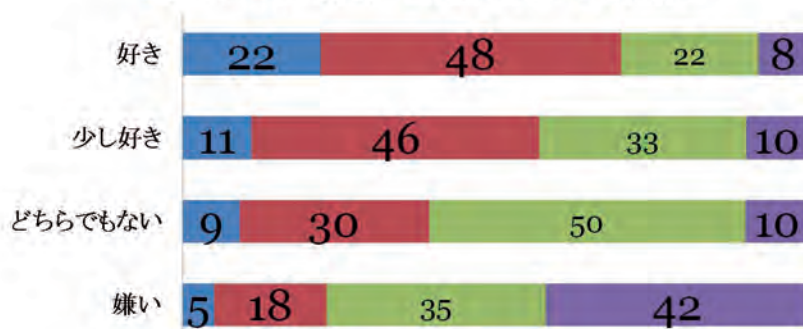
あなたのがんばりを認めたりほめたりしてくれる人は誰ですか？



<図17> 自己肯定感のもつ意味  
他の項目との相関関係から(因果の方向は?)-1

自己肯定感と「自分の考えをうまく伝えることができるか」

■ そう思う ■ 少しそう思う ■ あまり思わない ■ 思わない

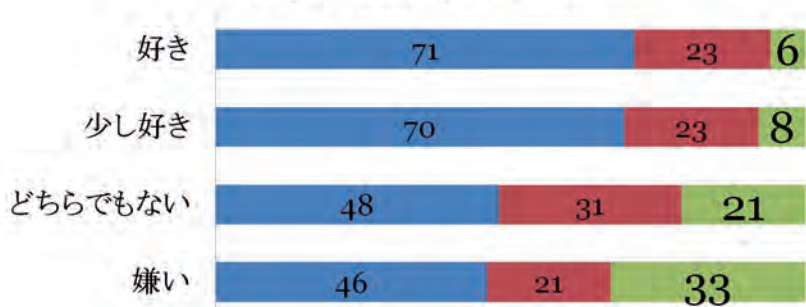


「嫌い」タイプにおける「思わない」の極端な高さ。悪循環になる？

<図18> 自己肯定感のもつ意味  
他の項目との相関関係から(因果の方向は?)-2

自己肯定感と「自分の考えが伝わるとうれしいか」(中学生)

■ そう思う ■ 時々そう思う ■ 思わない



「嫌い」傾向が強まるとともに、「思わない」が大きく上昇。  
「伝わっても別にうれしくない」という気持ちをもたらし結果は？

「伝えることができないと思っている」傾向が強まれば人と関わるという動機付けが失われ、ますますコミュニケーションから撤退するという悪循環が生まれ、それが自尊感情の問題と密接な関わりをもってしてしまうことになります。

すごく印象深かった調査結果として、自己肯定感と「自分の考えが伝わるとうれしいか」とのクロス集計結果があります<図18>。

この結果ですごく気になるのが「思わない」と答えた部分です。「自分が好き」と答えた子どもか



ら「嫌い」と答えた子どもにかけて徐々に「思わない」という割合が増えていき、「自分のことが嫌い」と答えた子どもの33%が、「伝わってもうれしくない」と答えています。これはコミュニケーションにとって致命的なことです。自分が人と接して何かを話す、何かを伝えようとする。ところが「伝えようとする」ということが「自分が動機付けになりませんし、「伝わった」ことも「うれしくない」。このような悪循環の中にいる子どもは、人間関係から撤退してしまうことが危惧されます。私はここ10年ほど「ひきこもり」に関する研究を続けていますが、「ひきこもり」はもちろんですが、就労問題についての調査を見ても、求人が少なくなると就労が厳しくなること以外に、人とコンタクトすることが非常に苦手だということを「就労活動をするのが困難」とする理由にあげる人が増えています。対人関係から撤退してしまい、人と付き合うことをネガティブに考えてしまうというのは、生き方の幅を非常に狭めてしまうことになります。場合によってはその人の生きる条件を著しく損なってしまう危険性があります。

### 論点3のまとめ

#### \*自己肯定感の意味

- ・他者との関わりをつくる能動性と関係が深い
- ・少なくとも「自分のことが嫌い」という状態が長期に維持されるのは問題である

#### \*自己肯定感に欠ける子どもが一定数存在する

- ・小⇒中で増加傾向にある
- ・小⇒中で「ほめられる経験」の減少が見られるのはなぜか？

#### \*「ほめられる経験」をいかに提供するか

- ・家庭・学校・地域社会、それぞれの場での可能性
- ・どのようなアプローチがあり得るのか？

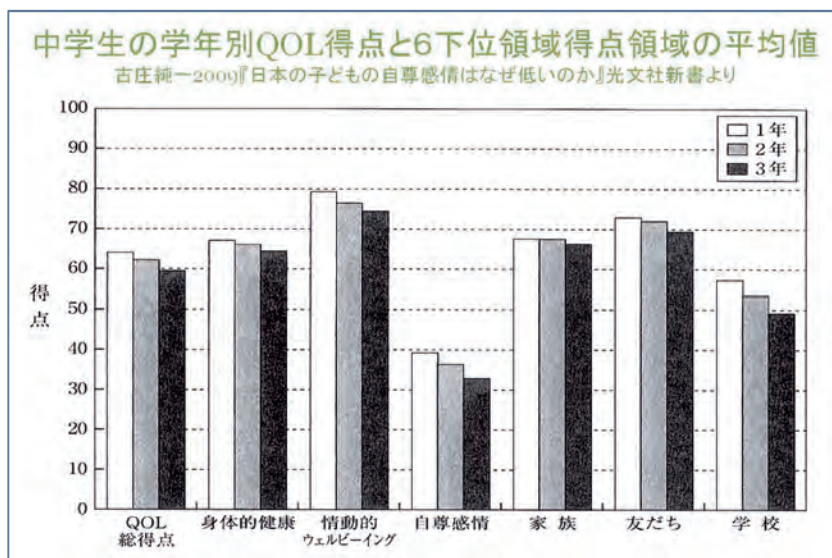
「認められるような行為や努力」とは？

「認められるような行為や努力」への踏み出しをいかに支えるのか？

これで私の提案は終わりますが、議論をする上で少し考えたいと思うのは、私たち大人が子どもたちと日々接する教室や家庭などの場で、子どもたちに何ができるのかということです。例えば、ほめたり、挑戦の場をつくったりすることが考えられますが、個々の場で、何ができるのかということを考えることです。「日本の子どもはどうして自尊感情が低いのか」ということを書いている、古庄純一という精神科の医者が座長となって国際比較調査を行った結果を<図19>に示しました。

<図19>

その報告を読んで興味深いと感じたことがあります。オランダの子どもはすごく自尊感情が高いということです。古庄は、オランダの学校というのは少人数教育で、しかも個別教育で、個々の生徒がそれぞれ参加するということが授業が成り立っていることを、子どもが「これを学びたい」「これをやりたい」と提案して、それが授業の中に反映される、ということを書いています。





いろいろな形で挑戦したり自分が認められたりほめられたりすることは、子どもたちにとって快感を得ることにつながっていると考えられます。どのくらいのクラスサイズなら子どもたちの要求に応えられるのか、個別教育ということが教育政策で認められるのか、子どもの「これやりたい」という声に合わせてカリキュラムを構成できるのかなど、日本の学校教育で実現可能性を考えるとすごく難しい部分があると思います。しかし、こうした子どもの環境を大きく規定する枠組ということについても考えなくてはならないと思います。

今日話したからといって、明日どうなるといった問題ではありませんが、中長期的な課題としてこうした枠組みの問題についても議論していくことも重要だと思います。私たちは世代を超えて教育という営みを続けていくわけですから。

だいたい予定された時間になったと思います。ひとまず私の話はこれで終わります。

## 質疑

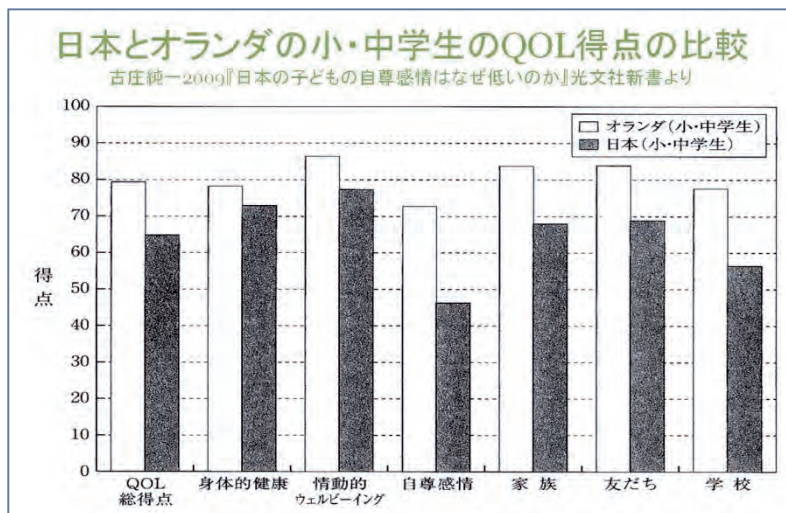
Q：先程説明があった、オランダと日本の小中学生のQOL得点の比較についてもう少し説明していただきたい。

A：子どもの生活全面にわたるQOL（quality of life：生活の質）は、子どもの生活について「身体的健康」「感情的・情動的な心地よさ」「自尊感情」「家族」「友だち」「学校」の六つの観点から聞いたものをスコア化したもので、その合計を総得点として一番左側に示してあります。日本の子どもの自尊感情についての得点は他の項目と比べすごく低い上に、小学校では2年生から6年生にかけてどんどん落ちていきます。中学生でも学年が上がるにつれ下がっています。古庄はスコアを出すのに子どもたちに「とてもよい」「ややよい」「ふつう」「やや悪い」「悪い」という5段階評価で聞いています。5段階評価で聞いて、自尊感情の平均値が40点を切っているというのは、多くの子どもの「悪い」「やや悪い」と答えていることを示しています。なぜそんなに悪いのか？ということが古庄にとってもショックだったようです。＜図20＞は日本とオランダの小中学生のQOLの比較です。

＜図20＞

なぜオランダを比較対象に選んだかといいますと、ユネスコが子どもの生活全般について30数カ国国際比較調査を行っています。その中でオランダの子どもの調査結果が、生活の質という部分で一番高かった。それで、オランダを比較の対象としたということです。ほかの項目でも差が認められますが、自尊感情についての差が著しいという結果が出ています。古庄は、差の背景として何があるのかについても書いていますが、クラスサイズやカリキュラム、教育方法の違いということに触れています。そのほかにも、保護者の労働時間の違いということもあります。オランダと日本では労働時間が全然違います。夫婦そろって一定の時間に家に帰り、子どもとコミュニケーションの時間をもつことができるなど、日本に比べると圧倒的に恵まれた就労環境があります。

ですから、日本の子どもとオランダの子どもの自尊感情の差をすべて学校という問題に帰属させることはできないと思います。生活全般の問題でもあるわけです。



## シンポジウム

荻野さんからの基調提案をもとに3分散会に分かれてシンポジウムを行いました。基調提案で示された＜友人関係への向き合い方＞＜発言の頻度を低下させる「めんどろ」の急増は何によるのか＞＜自己肯定感を支える「ほめられる経験」をいかに提供するか＞を話し合いの入り口として話し合いをすすめました。分散会で出された意見を、論点ごとにまとめて報告します。

### 論点1 ＜友人関係への向き合い方＞について

#### 友人関係を維持するために

子どもたちが友人関係を維持するためお互いに気をつかいあうことは、ごく自然に行われることです。しかし、集団から排除されることの恐れから、過剰な集団への同調圧力を感じてしまうという問題も起こります。子どもたちの友人関係への気づかいと、気づかいの仕方における男女の違いについて話し合いました。

#### ＜女子、男子に共通する人間関係を維持するための気づかい＞

- ・中学校の教室で子どもたちを見ていると友人関係に気をつかい、人間関係に疲れているように思います。男子は自分の気持ちをあまり口にしません、気をつかっていることが感じられます。女子は「群れる」ということが言われますが、本当に仲間がほしいのか、友人関係に気をつかって仲間に入ろうとしているのか、考えさせられることがあります。バレンタインデーに女子どうしが「友チョコ」を交換しています。「贈らないと後で何か言われる」「贈らないと友だちに入れない」といった意識でやっているとしたら辛いだろうと思います。（中学校教員）

#### ＜女子と男子の友人への向き合い方の違い：女子に強い同調圧力？＞

- ・男子と女子では友だちどうしの向き合い方に違いがあると感じています。女子の場合、ケータイにメールが来るとすぐに返事を返したり、一緒にトイレに行ったり、教員のところに来る時もペアで行動したりします。男子は一人で行動するという姿が見られるように思います。（中学校教員）
- ・中3の娘と小3の息子がいます。人間関係の難しさを言うてくるのは娘の方です。学級の様子を見ても女子は「群れたがる」「一緒にいたがる」ように見えます。教育相談の時なども男子は友だち関係のことはあまり言いません。（中学校教員）
- ・担任している小学校1年生では男女関係なく遊んでいます。メンバーも固定化されていません。高学年になると女子はグループ作りで揉めたりするというのを聞きます。（小学校教員）
- ・小学校で5年生を担当しています。「悩みが相談できる友だちがいるか」「仲直りするためにどんなことをするか」という問いに対する答えが、男女で大きな違いがありました。女子には女子の、男子には男子の問題があるのだと改めて思いました。（小学校教員）
- ・修学旅行などの班づくりをするとき、女子の班をつくるのは非常に難しい。男子の班は非常に簡単です。男子の場合は必ず「僕らどっちでもいいよ」というペアが必ず2つぐらいあってじゃんけんなどで決まるのですが、女子の場合はそこで「涙を流す」といったことが起こります。（小学校教員）
- ・男女の違いということになるのでしょうか。子どもが悩んでいるのを見ると、私はせっかちに「どうしよう、何とかしよう」とすぐに答えを出したがりです。夫はそういった感情を表に出さず、答えを次の日に持ち越すことができるように思います。（保護者）



## 男子と女子、友人関係への気づかいの仕方の違いはどこからくるのか

男子と女子の友人関係への気づかいの仕方の違いについて、研究者から「感情労働」という言葉で解説がありました。

### ＜女子と男子の違いはどこからくるのだろう：長い間の「価値観」の刷り込み？ 感情労働とは＞

- ・長い間「男性はこうあるべき、女性はこうあるべき」といった刷り込みを受けて固定化されてきたものが、男子と女子の違いとして出てきているように思います。(小学校教員)
- ・性による意識の違い「男子は弱音を吐かない」「女はいつもにこにこしている」などは、今までの日本の慣習というか風土といったものも影響していると思います。(中学校教員)

### ＜感情労働＞

- ・基調提案者の荻野さんの説明に「感情労働の担い手として…」という表現がありました。「感情労働」という言葉は、比較的新しく提示されたものです。例えば、キャビンアテンダントといった職業は客に「お客様を大切にしていますという感情」を提供しています。こういう仕事は、「女性に向いている仕事」だと考えられてきました。看護師さんや小学校低学年の担任などは女性が多いという傾向が、今でもあるのではないのでしょうか。結婚に関する調査を見ると、結婚しない理由として女性からは「自由がなくなる」「負担が増える」などがあげられますが、男性は結婚すると「仕事がしにくくなる」などとは少しも思っていないようです。暗黙のうちに女性には「家族のケア」や「家庭が安らぎの場になるように努める」ことが求められていることを示しています。こういうことが小中学校の時から女子児童生徒の意識形成にかかわっていて、調査結果にも出ているのではないかと思います。「女性は感情労働をするのにふさわしい」ということは社会が規定づけているということで、本来、女性が感情労働に向いているということではありません。(研究者)

## 友人関係づくりとケータイ、インターネット

子どもたちの人間関係のトラブルの原因として携帯電話が問題視されてきました。基調提案でも「流布されたイメージ」として取り上げられています。人間関係に不安を感じている子どもはネットなどの書き込みを気にしている、という指摘は情報リテラシーを高めるということと共に、「ケータイの問題」を考える上で重要な視点だと思います。

### ＜回避できない携帯電話の普及：情報リテラシーを高めることが必要＞

- ・「友だちと仲良しでいるためにどんなことに気をつけていますか？」という問いに、「悪口を言わない」という答えが多くありますが、インターネットのサイトに悪口を書き込むという問題が一方にあります。調査結果を見ると携帯電話の所持率もそれほど高くはないようですが…。(保護者)
- ・携帯電話の所持率が半分というのは、保護者の立場で感じている数字と合っています。携帯電話に関するトラブルは、マスコミなどで大きく取り上げられるので、意識が過剰になり「警戒しましょう」ということになるのでしょうか。(保護者)
- ・まだ情報モラルの教育なども不十分だったころ、6年生の担任をしていた時のことです。両親の目が子どもに届いていなかったのでしょうか。子どもは布団の中からケータイでサイトへのアクセスを繰り返していました。それがもとで他のクラスの子ともトラブルを起こしたり、メールで知り合った他県の人に会いに行ったりするという問題に発展しました。(小学校教員)
- ・私の勤務する学校でも、裏サイトに悪口など書き込んだりすることがありました。保護者の方にも携帯電話についてケアの必要性を話し、子どもにも指導しました。携帯電話の所持率は学校によって差があるように思います。(中学校教員)



- ・サイトへの書き込みの問題はすごく気になっています。学校の方から裏サイトにアクセスすると「学校が入った」ということで新しいサイトを作られてしまいますが、「学校が入っていく」ということを伝えるだけでも効果があると考えています。(中学校教員)
- ・ケータイが人間関係の問題に発展するのは女子に限ったことではありません。しかし、それは男子にしても女子にしてもほんの一部です。携帯電話がこれだけ普及すると、どう使うのかということをお教えていかなくてははいけないと考えます。保護者と協力しながら子どもたちにモラルを教え、持たせる持たせないは家庭で判断してもらうことだと思います。(中学校教員)

### ＜ケータイのストレス：人間関係の不安が、他人の視線を気にさせるのではないかな＞

- ・人間関係に不安をもっている子どもは、いつでも「何が書かれている、書かれるんじゃないか」ということを気にして、引きずられてしまうように思います。(中学校教員)
- ・メールをやりとりしていて、最後に『じゃあね』と書いてもメールが来る。「また返事をしなくちゃいけない」ということがストレスだと言っていました。ケータイでも、クラスでも群れの中にいなくちゃいけない、地域、家庭などいろんな場面で気をつかっていると思います。(中学校教員)

### 子どもたちの友人関係の広がりをおどう支えていくか

子どもが成長するには、周りの人との関係を結び、広げていくが必要です。今の子どもたちが人間関係を結び維持していくためには様々な障害を自分で越えていかなくてはなりません。分散会の最後は、大人がどのように支援していくかについて意見を出し合いました。

### ＜友人関係の広がりをお支えるモデルをお子どもに示す＞

- ・田舎に住んでいます。近所の子どもたちが遊んでいる様子を見ると、子どもたちが親から離れないといったことが気になります。昔は、子どもたちどうしで遊んでいましたが、子どもたちの友人関係のすぐ後ろに親の姿が見えているように思います。(保護者)
- ・地域みんな知り合いというような所で子どもは育ちました。高校で知らない人ばかりという環境に入った息子は「俺は人間関係をうまくやるのに努力した」と言っていました。自分なりに人間関係を新しく結ぶ努力をしたのでしょう。見本が周りにあれば、会話をどうつなげていったらいいのか、人間関係をどう結んでいったらいいのか、「こうやればいい」ということもわかるし、自分が相手に働きかけないと相手からも返ってこないということも学ぶことができると思います。(保護者)
- ・面と向かって話をしている時には、にこっと笑った顔や、首をかしげるといったしぐさから相手の気持ちを読み取ることもできます。けんかをした後に「直接会って話す」という回答が非常に多いことに、大きな期待感をおもちました。(中学校教員)
- ・女子と男子の友人への向き合い方の違いについては、2つの仮説が考えられると思います。1つは、「女子は男子より、人をケアすることを求められて育てられる」ということです。このような環境で育てられた女子は、他の同性の人が誰かをケアしているかどうかということに非常に気をつかい、ケアしていないと「それってちょっと違うんじゃないの」と思いやすい。もう1つは「子どもは親(家族)を見て育つ」ということです。たいていの家庭では父親は仕事のことを考え、家のことはあまり考えません。しかし母親は家族のことに一生懸命気をつかっている。それを見てきた子どもは、それぞれ自分の同性の親を学習するということです。家庭の中で、もう少し男性と女性の付き合い方、お互いに思いやるというかたちをお子どもに見せることができれば、女子の気のおつかい方も変わってくるのではないかなという期待をおもっています。もう1つ、日本の家庭は「夫婦どうしほめあわない」ということがあります。だから子どももおほめない。夫婦のあり方をお変えないと子どもは変わらないと思います。(研究者)

## 論点2＜発言の頻度を低下させる「めんどろ」の急増は何によるのか＞ 「めんどろ」という気持ち

子どもたちの授業中や自治活動での発言参加が小学生から中学生で大幅に減少します。その理由として「めんどろ」という態度傾向が考えられます。話し合いは「めんどろ」という言葉がどのような場面でつかわれるのか、「めんどろ」という気持ちはどこからくるのかということから始めました。

### ＜日頃、耳にする「めんどろ」という言葉＞

- ・小学生、中学生、高校生の子どもがいます。中学生の子どもがよく「めんどくさい」と言います。基調提案を聞いてなるほどと思いました。(保護者)
- ・中学校で教員をしています。中学校での教科指導は「めんどろ」とのたたかいだと思います。子どもたちは何とか楽をしようと「頑張り」ますから。何とか子どもたちの手が挙がるような授業をしたいと考えています。(中学校教員)
- ・中学生になると「めんどろ」という感情が増えているという指摘がありましたが、小学校の高学年でも発言は少なくなっています。学級活動での話し合いにもすすんで発言する子は減ってきたように思います。(小学校教員)
- ・私も家でよく「めんどろ」という言葉を使います。自分の中学校時代を考えても何となく「めんどろ」という気分はわかります。それが何なのか言葉にするのは難しいのですが。(保護者)
- ・勉強もそうですし、洗濯物を「たたんでおいて」といった場面でも「めんどろ」ということがあります。(保護者)
- ・幼稚園と小学校2年生の子どもがいます。私と小2の娘の会話の中で「めんどろ」という言葉を聞いた幼稚園の子が、「めんどろって言葉は使っちゃいけないだよ」と言いました。「めんどろ」という気持ちはどこからくるのか知りたいと思います。(保護者)
- ・現在の世相や政治の状況と子どもたちの意識がどのようにつながっているのか興味があります。今日の調査報告を聞きながら、子どもたちの姿に健全なものを感じましたが、その健全さが育っていくものなのかどこかで挫折してしまうものなのか、心配するとともに興味があります。(研究者)



### ＜「めんどろ」という気持ちはどこからくるのか：中学生の発言頻度の減少との関連は？＞

- ・何でも世相に結びつけてしまうことは危険だと思いますが、社会事象を対象に取材をしている立場から言うと、世の中の動きとの接点で「めんどろ」ということが起きているように思います。学校の中で議論の場が少なくなったり、学校の中でみんなが喋らなくなったりしたことと関係があるのではないかと考えています。(有識者)
- ・「誰かが自分と同じことを言ったら、もう自分は言わなくていい」と考える子どもが増えているように思います。難しそうだと「めんどろ」と言ってやろうとしない子がいるように思います。「めんどろ」という言葉で苦手なことから逃げようとしているのではないのでしょうか。(小学校教員)
- ・苦手なものや難しいことは避ける傾向にあるように思います。子どもたちは「自分が何もしなくても、そのうち誰かがやってくれる」という経験をしてきたのではないかと感じます。大人でも「誰かがやってくれないかな」と思うことがあります。(中学校教員)
- ・中学校の場合、受検ということも関連しているのではないのでしょうか。みんなと一緒に何かをしながら、自分は秀でなくてはならないというジレンマがあるのではないのでしょうか。(中学校教員)

- ・中学校で発言頻度が下がるということですが、中学校1年生は、よく手を挙げて意見を言います。学年を追う毎に発言が少なくなっていくと思います。「発達段階だからしょうがない」とするのでなく考えていきたいと思います。(中学校教員)
- ・自分の周りでも議論をしなくなったと感じています。議論は自分が何か言い、相手のことを聞かなくてはなりません。それによって情報が共有されます。しかし、インターネットは一方的に言いたいことを言い、聞きたい時に聞くということといい。一人一人の個の世界が「オンリーワン」などと価値あることだと流布され、場を共有しながら話すということがしにくくなっているのではないのでしょうか。(有識者)
- ・学生にできるだけいろいろな意見を出してもらおうと質問すると、「(前の人の答えと)同じです」という答えが返ってきます。「何か違うことがあるでしょう。違いを考えて下さい」と言うと、「こんな授業は小学校以来やってもらったことがない」と言っています。やる教員も学生も「めんどろ」なんです。しかし、「めんどろ」をあえて引き受けるという意識を掻き立てないと新たな理解は得られません。知ろうとするのは大変「めんどろ」なことなのです。そういうことを日本社会はやらないできたのではないのでしょうか。大人が「めんどろ」と思っていることが子どもの世界に投影されているように思います。(研究者)

### ＜減ってきた子どもたちの「めんどろ」という感情を引き受ける場面＞

- ・以前は、話し合い活動に時間をとることができました。教員が時間のゆとりをなくしたり、子どもも時間に追われるような生活を送ったりすることが多くなり、議論をして共通理解を広げていくことを丁寧にやるのが難しくなっていると感じています。子どもたちも、生徒集会とか全校総会といったような場面で活発に質問したり、意見を言ったりすることが少なくなっていると思います。議論の仕方や話し合いの仕方を学ぶ機会が少なくなっているのではないのでしょうか。(中学校教員)
- ・新しい教育課程になって、授業時数が増え、特別活動などの時間確保が難しくなることを心配しています。学校は「めんどろ」をいかに経験させ、達成感や喜びを感じさせることが一番大事なことでないかと思います。解き方を教えればすぐに「答え」は出てきますが、「めんどろ」なことを一生懸命やって結論を出すという過程が「めんどろ」を乗り越える力になるのではないのでしょうか。(小学校教員)
- ・納得させるとか、任せるということにはすごく時間がかかります。試行錯誤を通して子どもたちが納得するという時間を確保することが難しくなると「めんどろ」という感情が子どもに広がっていくことが心配されます。(元教員)
- ・自分の職場で最近感じていることがあります。お互いに「わかった」ということで少しずつ納得の度合いが違ふことがあります。だから「できるだけ話をしよう」といったことを盛んに言っています。大人の社会では「余分なことは喋らない」ということがあります。子どもの社会の中にも同じようなことがあるように思います。フレンドリーな関係、聞き上手になる、ということが必要だと感じています。(有識者)
- ・学校教育というのは「めんどろ」が当たり前だと言ったけれど、「めんどろ」をできるだけ消去するシステムの中で子どもたちが育てられています。それは、子どもたちにとって不幸なことだと思います。人間としてのいろいろな能力を開発していくためにも、自主的にいろいろなことを考えていくためにも、ある程度の「めんどろ」が必要だと思います。(研究者)





## 「めんどう」という子どもたちの感情をどう引き受けるか

子どもたちの「めんどう」という感情をそのままにしておくことはできません。どのような手だてをすれば子どもたちが「めんどう」という感情を乗り越えていくことができるのか、大人はどのような支援ができるのかについて話がすすみました。

### ＜自分の役割や責任を理解すると「めんどう」とは感じない。責任をもたせ、見守ること＞

- ・地域で行う餅つきなどの時、上級生が小さな子どもたちの面倒を見ることは「めんどう」と言いません。小さな子どもの面倒を見るのは自分の役目と思っているからだと思います。「誰かがやってくれる」「私がやらなくてもいいんじゃないか」という場面では「めんどう」という言葉が出ます。(保護者)
- ・娘が米をといでいます。自分の仕事として任されているので「めんどくさい」と言わず毎日やっています。家の中で認められているということが「めんどくさい」という気持ちにさせないのだろうと思っています。(保護者)

### ＜課題を解決のスキルがないと「めんどう」と思う。体験を通してスキルを身に付ける＞

- ・最近、学級活動が少なくなりました。学級活動には、話し合いのスキルを高めるという意味もあります。自分たちのことについて意見を出し合って決めることを通して、話し合いのスキルを高める。発言することに意味があるということを経験させることは、自分の存在意義を高めていくことにつながると考えます。(小学校教員)
- ・「めんどう」なことの1つに人間関係があります。意見を言うと、後のフォローをしなくてはなりません。それを「めんどう」と感じて言い淀んでしまうのではないのでしょうか。人間関係も「めんどう」なことをたくさん経験した方が人生は豊かになると思いますが、小中学生に言葉で伝えるのは難しい。「めんどう」なことをやってよかったという体験をさせることで伝えていくことだと思います。(小学校教員)
- ・勉強は、最初はよくわからず「めんどう」でも繰り返しやっていくことで面白いことが見つかったり、興味がもてたりするようになります。部活動で繰り返し練習することの大切さなどを話したり、体験させたりすることもアプローチの一つだと考えています。(中学校教員)
- ・大学で教員免許状をとるために「総合的な学習についての演習」があります。学生に「総合的な学習のプログラムを考える」といった課題を提示すると、素晴らしいプログラムを作る学生がいます。その学生は、たいいてい小学校や中学校で総合的な学習をしっかりと経験してきたと言います。総合的な学習の経験は、大学でゼミなどを自主的に組織する力などにつながります。「みんなで調べて、みんなで考えていく」ということが訓練されているから、意見が違うのは当たり前だということがわかっています。(研究者)
- ・言ったり聞いたりするスキルを高めることで、発表することのストレスは少なくなると思います。また、必要性を感じないまま発表することを求められるとストレスを感じます。必要性を感じないというのはもっとまずいことです。意見を言ったり、伝え合わせたりすることが人間関係の幅を広げたり、視野を広げたりすることに有効だという必要性を感じず体験を積み重ねることが大事だと思います。(有識者)
- ・体験ということですが、グループ活動に班長交代制を取り入れています。話し合いを上手にすすめられる子もいますが、あえて苦手としている子にも任せるということです。意見を言ってもらわないと困ることや、意見をつないでいくことの大事さを経験することになります。経験をすることによって、「班長さんは困っているかもしれない」「意見を言おう」など相手を気づかうことができるようになり、相手とつながることを「めんどう」と感じなくなると思います。(小学校教員)

### ＜学校として組織立った指導の体制をつくる：どの子の力も伸ばしたい＞

- ・子どもたちが生きていく力として必要なことに、コミュニケーションの力や協調していく力があります。人は一人では生きていけないので人と関わりながら生きていく。そのためには、人の意見を聞いて、自分の頭で考えて、次につなげていく力が大事です。その力を付けていくために学校全体で、例えば「6年生できちんと話し合いができる」という目標を立てたら、低学年では自分が気づいたことを人に話すことができるようになる、中学年では人の意見に自分の考えをつなげることを経験するなどの目標を立て、子どもを鍛えていきます。理想の姿に近づけるためには、どのクラスでも同じように指導するといった、組織立った学校運営が必要だと思います。（小学校教員）
- ・学校が1つの単位として到達目標をたて、手だてを考えることによって子どものあり方が全く違ってくるといことです。総合的な学習をきちんとやってきた学校とそうでない場合とでは大きな差ができます。小中高の教育はすごく大事なのだと思います。（研究者）
- ・みんな同じように鍛えていくことが必要だというお話がありましたが、親としては、一人一人が同じような教育により同じような力を身に付けていってほしいと思います。先生方が同じようにやってくださるということはすごくありがたいと思います。（保護者）

### 論点3＜自己肯定感を支える「ほめられる経験」をいかに提供するか＞ 「ほめる」「認める」ことをキーワードに子どもの様子を語る

自己肯定感や自尊感情を高めるためには何が必要なのか？ 調査により「ほめられた経験」「認められた経験」が自己肯定感を形づくる上で大きな役割を果たしていることを明らかにしました。「ほめられる経験」「認めてもらった経験」をキーワードに家庭や学校での子どもたちとの関わりについて話し合いました。

### ＜よさを見つけてほめる：ほめることと叱ることについて＞

- ・6年生を担当した4月、「自分のことが好きですか？」と聞きました。「自分のこと好きか？」など聞かれたことがなかったので、どう答えていいかわからず「？」といった表情をしていました。「人に優しくできる」「スポーツが得意」などの例を出すと、「それならある」ということになり、自分のよさについて語り始めました。学校で特別支援のことについて話し合った時、「障がいをもっている子どもたちは叱られることが多いので自己肯定感が低い」ということを聞きました。子どもたちへの支援は、できることをいかに伸ばすかということだと思いました。（小学校教員）
- ・小学1年生を担当しています。毎日、「こういうことができるようになったよ」、「すごいね」という会話を交わしています。それを聞いて「そんなことを自慢しちゃいけないだよ」と言った子がいました。どうしてそう言ったのか、その子のことが今でも気になっています。（小学校教員）
- ・在籍生徒の1割近くがブラジルやペルーなど外国籍の子どもです。昨年、「自尊感情」についてアンケート調査を行いました。日本の子どもよりブラジルやペルーの子どもの方が「自分のことが好き」と答えていました。彼らには親や周りの人から「あなたのことが好きだよ」「アイラブユー」といった言葉掛けが頻繁にされています。その違いが「自分のことが好き」と答える割合の違いになっているのではないかと思います。（中学校教員）
- ・自己肯定感という言葉をここ数年よく耳にします。対人間の社会ということが意識されていることと関係しているのかもしれませんが。自分も対人関係で悩むところがあります。相手からはどう見られているのか考えるのは、子どもだけでなく、誰でも経験していることだと思います。（中学校教員）

- ・高校2年生と中学2年生の二人の母親です。私自身、自己肯定感が低い方だと感じているので、子どもはほめて育てたいと思っています。しかし、ただほめればいいというわけでもないし、どこまでほめるのかが難しいと感じています。(保護者)
- ・絵を描いていますが、絵が描けるときは自己肯定感があるときです。私は、小学校の3年生ころまでは絵を描くことが嫌いでした。絵が好きになったのは、4年生の時、ある先生と出会ったことがきっかけです。先生と一緒に版画を彫って年賀状を摺ったり、絵の話をしたりするうちに、絵を描くことに関心をもつようになりました。ある時、掲示板に僕の絵が貼ってあったんです。「あんな変な絵、貼らないでほしい」と言ったら、「お前この頃うまくなったから」と言われました。中学校では美術部に入り、今でも絵を描き続けています。(元教員)
- ・叱った子どもには、下校するまでにいいことを見つけてフォローするようにしています。素直に「ごめんなさい」と言えない子どもと自己肯定感の関係しているのではないかと思います。教員はどこで、ほめるかということを考えています。やたらほめても子どもは「この先生、上っ面でほめているな」とわかってしまいますから。(小学校教員)
- ・低学年の子どもには「駄目なものは駄目」とはっきり言わないと伝わらないことがあります。高学年は逆に丁寧に説明しないと反発します。子どもどうしの人間的なつながりをつくるのがうまい子どもがいます。そういう子は、ほめられたり認められたりする経験が多いから、上手に友だちに声を掛けることができるのではないかと思います。(小学校教員)
- ・私の家族は、連れ合いと二人の子どもです。連れ合いは、子どもにも「自分の責任」ということを割と厳しく求めます。私は、できなかったことを責めるより、ほめて育てるという考えですから、夫婦で言っていることが違ったりします。子どもはどちらの言っていることが正しいのか迷うかもしれません、それもバランスなのかなと思います。(保護者)



### ＜中学生になるとほめられることが減る：中学校の先生はほめないで注意する…？＞

- ・中学生になると注意することが増える理由は何でしょうか。私は「校内暴力世代」です。体育の先生など用心棒のようで気の毒でした。相乗効果で校則が厳しくなり、校則が厳しくなればいろいろなことがルール違反になるので、先生が注意する場面も増えました。今でも中学校では校則が細かく決められているのでしょうか。そして先生もそれに合わせて注意するということがあるのでしょうか。(研究者)
- ・制服が決められていれば「ボタンとめなさい」とか、スカート丈とかについて注意することがしばしばあります。基準すべてに合理的な説明をするということは難しいので、高校受検に必要だからということを経由にすることもあります。(中学校教員)
- ・朝、子どもたちに「おはよう」と言う前に、服装のことなどを注意しています。成人式で会った教え子から「派遣切りにあって仕事がない。勉強しとけばよかった」という話を聞くと、高校は卒業させ、セーフティネットの内側に居場所をつくらないと自己実現もないと思います。つい、「ちゃんとしろよ」と叱ってしまいます。(中学校教員)
- ・どうしても、きまりが守れない子に目が向いてしまいます。次の日「今日はできたね」などといった声かけもできるので、叱ったことがほめることにつながることもあります。(中学校教員)



- ・注意する基準は、社会的に受け入れられるかどうかということです。きまりを守るということが、子どもたちとのコミュニケーションの話題になることもあります。スカートの丈とか、髪の毛のことなどについてはあまり言いたくないと思っています。(中学校教員)
- ・中学生になると家族からほめられる回数が減るのは、部活が忙しくなったり、土日も家にいなかったり、接触する時間が減ることにも原因があるように思います。(中学校教員)
- ・叱られた子どもたちは「どうしたらいいのか」というところで行き詰まる。その時、「こう考えたらどうか」と方向付けをしてやるが必要だと思います。大学生に対して基本的生活習慣の指導をすることが就活指導のメニューに入っている時代ですから。難しいことだと思いますが、「できないと後で困るぞ」というのでは、子どもが自分のものさしを作ることにならないと思います。(研究者)

### 自己肯定感が低い理由はどこにある？ 自己肯定感を高めるにはどうしたらいい？

外国の子どもに比べ、日本の子どもは自己肯定感や自尊感情が低いと言われています。自己肯定感の育ちを阻害しているものは何なのか、自己肯定感を育てるには何が必要なのかについて考えを出し合いました。

#### <自己決定する経験、成功体験の不足が自己肯定感の低さにつながっている>

- ・自己肯定感がなぜ低いのか考えていました。大学生を見ていて、「自分で考えて決める」という経験を踏んでこなかったのではないかと思います。親がレールを敷いたり、周りから「これをしておかないと後で困るぞ」と指示されたり、子どもたちは選んでいるようだけれど選ばされていることが多かったのではないのでしょうか。自分で決めるという過程を踏まないと、自分で責任をとるということができなくなり、達成感を味わえないということになります。評価の問題も関係しているように思います。学校では絶対評価になっていますが、リアルな社会では相対評価によって評定されます。「みんな違ってみんないい」という価値と競争に勝つという価値の狭間で、子どもたちは自分を計る物指しをどう作るのか分からないのではないのでしょうか。(研究者)
- ・自己肯定感を高めるには「うまくできた」という成功体験が大切です。しかし、何かにトライしているときつくなる時があります。そのとき自分で決めたことでないと、乗り越えられず降りてしまいます。自己決定のことを当事者主権とも言いますが、本人の意志決定というのは、外から黙ってじっと見ていたら生まれるというものでもありません。自分もやってみようと思うようないいモデルを身近な関わりの中で提示してやることも必要だと思います。(研究者)

#### <自己決定、成功、失敗などの体験をどのように保障したらいいのか>

- ・どれだけのことができれば生きていけるということではないと思います。ソーシャルスキルは、生きる場で時間をかけて必要なことを覚えていければいいと思います。小学校や中学校を含め社会全体で緩やかにやっていけるのが一番いいのですが。しかし、時間をかけて育ててくれる場が少なくなってきたことが気懸かりです。(研究者)
- ・私の研究分野はスポーツですが、スポーツではできないことがほとんどです。試合をすれば半分は敗者です。失敗と向き合う、失敗から学ぶということが大事だと思います。学校は安心して失敗することができる場です。「できない」という子に対して周りの子が「こうやったらどうだ」「こうやればいいよ」などとインフォーマルな形で働きかけができる「学び合い、教え合う」場面を増やしていくことです。つまずいたときにSOSを出したり、助けを求めたりすることができる力が大事だと思います。(研究者)

- ・失敗から学ぶということですが、「やっpegらん。失敗してもいいから」という場面が少なくなっていると思います。新しい学習指導要領のもとで授業時間や指導内容が増え、子どもたちにとっても教員にとっても、授業を含めた学校生活が窮屈なものになることが心配されます。時間がかかる「子どもたちに任せる」ことがしにくくなり、「次はこれをやります」「このようにやります」といった指示を出さないと間に合わなくなるのではないか。新しい学習指導要領のもとでどのように時間を生み出してくかが課題だと思います。(小学校教員)

### 子どもたちは「できない」ということに対して危機感をもたなくなっている？

ここまで、子どもたちの自己肯定感を高める条件について意見を出し合ってきました。分散会をそろそろ閉じようとするころ、保護者から、子どもたちの中にある「できない」ということに対する危機感についての指摘がありました。基調提案をされた荻野先生からも「非常に興味深い指摘だ」というコメントをいただきました。分散会では十分な討論ができませんでしたが、新たな問題提起ということで受けとめたいと考えます。

### ＜「できない」ことへの危機感をもたない子ども＞

- ・失敗するということについて感じていることがあります。自分が「できない」ということに危機感をもたない子が多くなっているのではないのでしょうか。「できるようになりたい」と思うことが、できたときに「あっ、できた！」という達成感につながります。できなくても「まあいいか」ということでは…自己肯定感も達成感も得られないのではないかと思います。子どもたちには、できないことに危機感をもたせるべきだと思います。今、涙をぼろぼろ流して逆上がりを練習している子どもを見かけることが少なくなったように思います。「できるようになりたい」という気持ちをもたせて、それを大人がバックアップする、そういう繰り返しが自己肯定感につながっていくと考えます。(保護者)
- ・「できないことに危機感がない」という指摘に同感です。テストの点数が悪いから「どうしよう」と考える子はあまりいません。運動ができなくても「何とかしなくては」と考える子もあまりいません。「できる、できない」という価値基準の代わりに子どもたちの中にある価値基準は「おもしろい・おもしろくない」「友だちにウケる・ウケない」になってしまい、「ウケをねらえる」子が学校で人気者になっています。(小学校教員)
- ・非常に興味深い話です。失敗を失敗と認識しない子どもの姿が気になるという話を、「なるほど」と思いながら聞きました。「苦しかったけど頑張っpegできるようになった」という乗り越え体験は、実感を伴った自己肯定感につながると思います。私は、乗り越え体験ができないのは、誰かが(大人が)レールを敷いてしまっているからと考えてきたのですが、「失敗が失敗として認識されていないことが問題だ」という指摘は新鮮で、なるほどと思いました。はたから見れば失敗なのに本人にとって失敗と認識していないということの背景には何があるのか、考えていきたい課題だと思います。(研究者)



## 基調提案を聞き、シンポジウムを終えて

### 経験知を共有しながら、周りとうどう折り合うかを支援する

自分以外の人と人間関係を結ぶということは、他人の存在を認めるということで、周りの人が自分をどのように受けとめているかを考えることになります。自分を周り(相手)との関係の中に置かなくてはならなくなった子どもたちは、これまでのように他人の目など気にせず無邪気にふるまうことができなくなります。他人とつながり社会とつながっていくにはどうしても通らなくてはならないことですが、自分に注がれる視線や周りへの同調圧力を必要以上に受けとめてしまい、自分や自分の居場所を見失いそうになってしまう子どももいます。

大人には、子どもたちの人間関係の広がり位置づけながら、子どもたちが周りとうどう折り合いあったらいいのか”について支援することが求められています。支援はどのようにすればいいのでしょうか。どのケースにも有効な一般的な“解”はないようです。実践の中で得た経験知を交流し共有することを地道に積み重ねることが“解”への近道だと考えます。

### 公的なことに参加するときの「めんどろ」という感情を乗り越える

『子どもの人間関係づくりに関する調査』(研究所所報No.144)によると、授業中の発言について、「よくする」「時々する」と答えたものが小学生で77%、中学生で55%でした。この数値は調査設計段階での予想よりも高いものでしたが、小学生と中学生では20ポイントの差があります。この差について、シンポジウムの基調提案者により「めんどろ」という感情から分析的な考察が加えられ、子どもたちの「めんどろ」という感情について、様々な事例に基づいた議論をすることができました。

「めんどろ」という感情がどこから生まれてくるのかについての議論は、「めんどろ」という感情を乗り越える具体的な方策を展望することにつながるものだったと思います。

今回の議論で明らかになった“課題解決のスキルが身に付けば「めんどろ」という感情を乗り越えられる”という仮説を、実践的に明らかにしていきたいと考えます。

### 自己肯定感を高める成功体験を保障する

自己肯定感は、自分の存在や行動や意見などが他から認められることによって生まれます。子どものよさを見つけほめることが大事ですが、口先だけのほめ言葉は逆効果になります。子どものよさをきちんと見届けることや駄目なことは駄目とはっきり伝えることが必要です。一人一人の子どもに対する共感的な理解の姿勢は、保護者や教員だけでなく社会全体としても必要なことだといえます。

自己肯定感を高めるには自己決定する経験と成功体験が必要だという議論は、体験する(させる)機会をどのように保障するかということにつながります。結果や成果が性急に求められる風潮やタイトになった教育課程のなかで、失敗をしながら成功にたどり着く時間をどのようにして子どもたちに保障するかは非常に難しい課題になっています。

話し合いの最後に「子どもたちは『できない』ということに危機感をもっていないのではないか」という問題提起がありました。自己肯定感や達成感「できるようになりたい」という感情を出発としています。「できない」という感情も「できるようになりたい」という感情と背中合わせです。議論を深めるほど時間がなかったことが残念です。今後の研究課題にしたいと考えます。





